

Ⅲ 調査の経過

1. 概要

調査対象地は、奈良国立文化財研究所が藤原京、飛鳥地域でおこなっている地区割りでは、北半が6AMU区のK地区に、南半が6MU区のL地区にあたっている。発掘調査は軽池の北に位置し、東から西へむかってのびる丘陵地上の畑地とその南の平坦地にひろがる水田の一部についておこなった。その実施の手順としては、予定地の性格を早急に把握することが必要とされたことから、遺物の散布状況を考慮して、とくに遺物が顕著に見られる6AMU-K地区の丘陵地からおこなうこととした。

5月はじめに橿原市によって軽池北遺跡調査会が組織され、調査は5月13日から着手することとなった。調査は丘陵地のT6区から開始し、ついでT7、T5、T3、T2、T1区の順におこない、最後に東北部の一段高い丘陵地のT4区に及び終了した。

当初、この調査は遺構が存在するかどうかを確認することを主な目的として実施されたが、調査を進めたところ、丘陵地では後世の削平をかなりうけており、検出された遺構が比較的少なく、ほかの南傾斜地や南端の水田でもやはり遺構の密度が少なかった。そのため検出した各遺構については予定期間内で、その性格を知るうえに必要な限り調査地を拡張しておこなった。

2. 調査関係者

軽池北遺跡調査会

横田利平 山田耕二

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

工藤圭章 小笠原好彦 上野邦一 大脇 潔 川越俊一 井上直夫 丸川義広

3. 調査日誌

5月13日 発掘用具・器材を収納する道具小屋を組み立てる。

5月14日 調査地の中央部で磁北に合わせて幅4mの南北トレンチを設定(T5区)し、それと直交するトレンチを丘陵の尾根上に設定(T6区)する。さらにT5区の西にT7区、T5区の東にT3・T2・T1区を設定する。ユンボでT5・T6・T7区の表土を排土する。

5月15日 ユンボでT3区の表土を排土する。

5月17日 T2区の表土を排土する。T7区の

北半部から遺構検出をはじめる。表土の残りを排土するとすぐ下で洪積層の地山を検出する。顕著な遺構なし。ついでT6北の遺構検出をおこなう。北西部で瓦器を含む土壌KS125を検出する。中央部で掘立柱建物の柱穴とみられる東西に並ぶ柱掘方を3個検出する。柱穴はトレンチの北側にのびるらしい。写真1。

5月18日 東側でさらに柱掘り方を1個検出。これによって東西棟建物が予想される。T6区の南側で近世以降の大形土壌SK128を検出す

る。写真2。

5月20日 調査地全体の地区割りをおこなう。T5区の南端で瓦器などを含む土壌SK132とSK131を検出する。両者は重複しており、SK132が新しい。

5月22日 T3区の遺構検出をおこなう。中央部で西にのびる大形の土壌SK143と南北小溝SD142を検出。北端で東西小溝SD141を検出する。

5月24日 SK143を掘りすすめる。西端でさらに1段さがる。別の土壌状のものが重複している。写真3。

5月26日 T2区の遺構検出をはじめる。表土の下に厚い堆積層がある。上から第3層(茶褐色土)の上面で東西方向の小溝を数条検出する。写真4。

5月27日 T2区の第3層、第4層灰黄褐色土を下げる。壁面が崩壊する危険がでてきたので、西壁を階段状に掘り下げる。

5月28日 T2区の南端で地表から約1.5m下げて地山面を確認する。ただし、中央部とその北では確認できず。

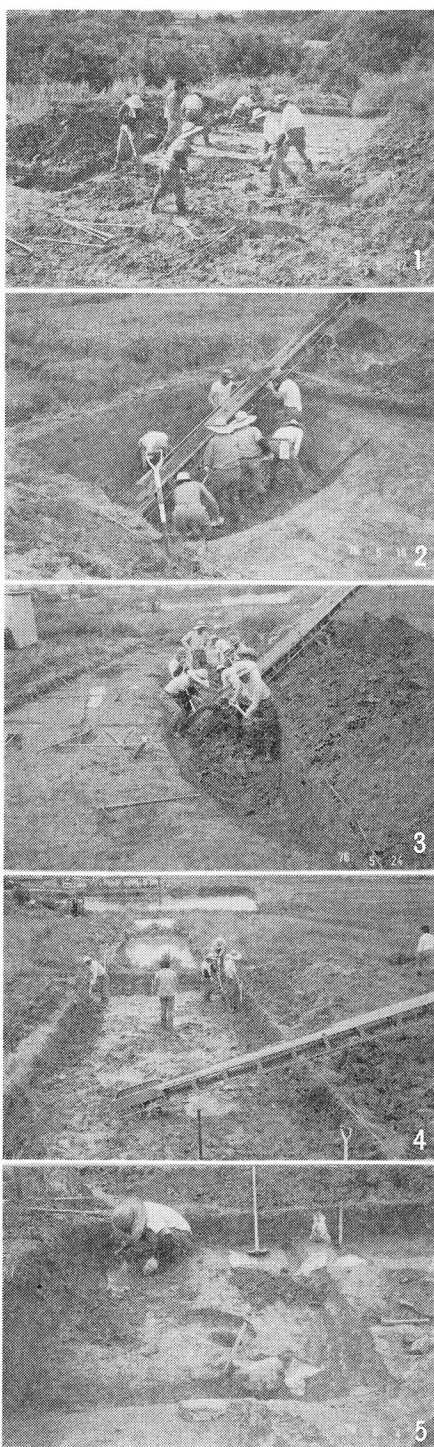
5月29日 T2区の中央部を掘り下げる。地表面から約3.5m下で地山を検出する。遺構の性格を明らかにするため東側に拡張することとし、作業を一時中断する。

5月31日 T1区の遺構検出をはじめる。表土のすぐ下で地山を検出する。南北方向の小溝を多数検出する。北端で土師器小皿、瓦器碗、フイゴ片を含む小土壌SK145を検出する。

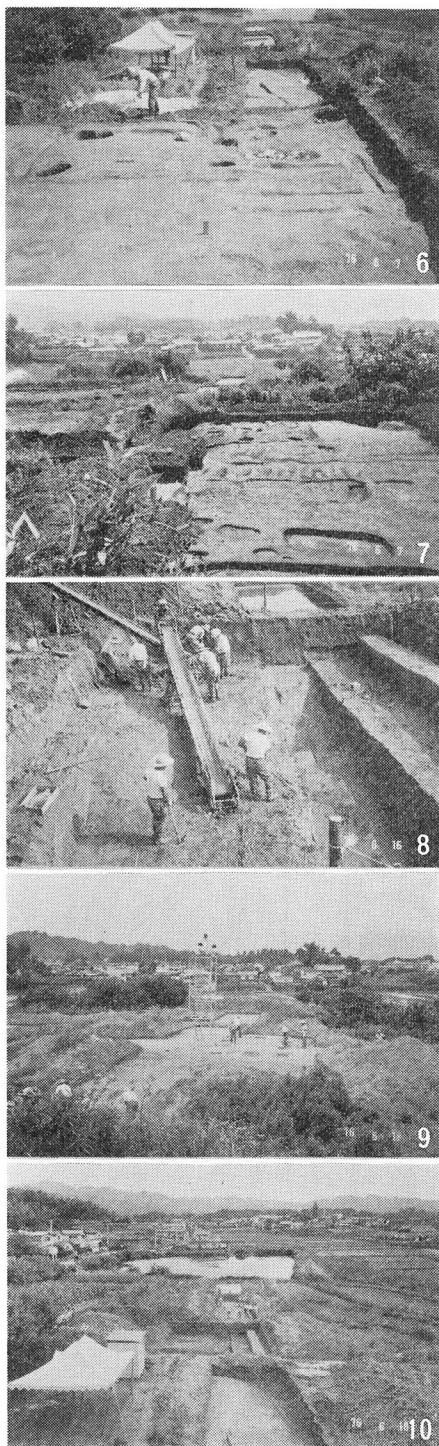
6月1日 T6区の掘立柱建物の規模を確認するために、調査区を北側に拡張し、3間×2間の東西棟建物であることを確認する。また新たに調査地の東端の丘陵上にもT4区のトレンチを設定する。

6月2日 T4区の東端は耕作土のすぐ下で地山を検出する。その東側で長方形の落ち込み(SB105)を検出。埋土は茶褐色土でなかに瓦器を含む。この落ち込みの南端で土師器皿、瓦器碗を多数含む土器溜りSK103を検出する。落ち込みの南壁を確認するため南へ調査区を拡張する。SB105と同様の落ち込みを調査区の西側でも確認する(SB110)。

6月3日 SB105の南・西壁を捜す。西壁は判然としないが、南壁を確認する。北と東側で周溝も検出する。西側の落ち込みも周溝と柱穴を確認し、これも堅穴住居跡(SB110)と判明する。ついでSB110の西壁を確認する作業をおこなう。SB110の西北端で土師器、瓦器を多量に含む土器溜りSK107を、またその南で堅穴住居跡とみられる落ち込みSB115を重複して検出する。そのため南と北側に調査区を拡張する。



第6図 発掘作業その1



第7図 発掘作業その2

6月4日 SB115を掘り下げる。SK107の土器溜りを掘る。SB115の北側で土壌SK106を検出する。瓦器を少量含んでいる。

午後から作業を中断していたT2区の東側をユンボで表土を排土して拡張する。新たにT7区を南へのぼして拡張する。写真5。

6月7日 T6区でSB120以外の建物の存在を予想して掘り上げたが、ほかに建物はない。T7区の遺構検出をする。表土の直下で地山を検出する。とくに記すべき遺構なし。写真5・7。

6月8日 T4区の竪穴住居跡とT6区の掘立柱建物の写真撮影。T7区の中央部で東西に並ぶ小さな土壌SK130を検出したが、性格は不明。

6月11日 測量用の基準点を設定する。国土座標とつなぐためトラバースを組む。

6月12日 T7区南端部の遺構検出。

6月14日 T7区の遺構検出終了する。顕著な遺構はない。ついでT2区の東拡張部に移りSD140を掘る。東西溝SD144を検出する。

6月15日 大溝状のSD140の灰黄褐色土を掘りさげる。実測用の遣り方を設定する。

6月16日～17日 SD140の灰黄褐色土の下に厚い暗灰色粘土層の堆積があり、7世紀末にあたる藤原宮跡出土の土器と共通する土器を含んでいる。T4・T6など実測を行なう。写真8。

6月18日 前回の撮影した残りの地区の写真撮影を行なう。写真9・10。

6月19日 T1・T2・T3・T7区に実測用の遣り方を設定する。

6月21日 T1・T2・T3・T6・T7区の遺構を実測。

6月22日 T2区のSD140の南岸を掘り下げ底を確認する。またT3区の南端を掘り下げてSD140との関連性を検討する。T4区のSB105を精査し、柱穴4個を検出する。SB105・SB110の床面の断面図を作成する。

6月23日 T5区の遺構を実測し、現場での作業を全て終了する。